

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	佐藤 陽介
論文題目	『悪の華』における主体性—「死」の解釈
審査要旨	
<p>本論文は、19世紀フランスの詩人シャルル・ボードレール(1821-1867)が遺した唯一の韻文詩集『悪の華』における一人称「主体」の特異なありかたと、この詩集から読者に対して放散される強い磁気のような力(それを著者は作者の死後にも生きつづける作品の「主体性」と呼ぶ)を多角的に論じたものである。</p> <p>序詩および本編100篇の全5章から成る『悪の華』初版は1857年に刊行され、同年風俗紊乱の咎で、6篇の削除を命じる有罪判決を受けた。ボードレールはこの暴力的な権力の介入に反撃するかのようになり、その後書き下ろした新作35篇を増補し、さらに配列にも手を加えて、全体を全6章に再編集した『悪の華』第2版を1861年に刊行することになる。本論文で主たる読解の対象となったのは、初版と第2版の双方で「死」と題する最終章に収められた諸篇である。</p> <p>まず「序論」で著者は、『悪の華』における主体性を考察するにあたり、「主体性の働きの根拠である主体が失われる契機」としての死のテーマを論ずる必要があることを確認する。本論文が「終わり」から、すなわち「死の分析」から、具体的には『悪の華』の最終章の読解から始まるのはそのためである。このようにして本論文での読解の作業は、スタティックで並列的な訓詁註釈の営みを越えて、詩集全体の構成を見通したうえでの、ダイナミックな遡及運動となっている。</p> <p>『悪の華』初版の第5章「死」には3篇の詩が収められているが、それ以外の章にもこの詩集には死をテーマにした詩が多くある。本論文第1章「詩人の死」では、とりわけ初期の詩篇を分析しながら、この時点では死がいまだに「生の外に」あるもの、つまり主体の外部に観察されているものにすぎないとしている。そして、詩人において死が主体に真に内在化したものとして捉えられようになるのは、『悪の華』第2版に追加された補填詩篇においてであるとするのが著者の卓抜な着眼点である。それによれば、1857年の官憲による詩集の断罪こそが、ボードレールにとっての主体的な死の体験にほかならず、彼は惨殺されたおのれの亡骸を手厚く弔うかのようにして、いったん破損された詩集の第2版をはじめから丹念に作り直してしているのである。補填詩篇にしばしば見られる「柩」や「石棺」のモチーフは、詩人のために準備された墓としてのこの詩集の性格を如実に物語っていると指摘はじつに衝撃的ではあるだろう。</p> <p>さらに著者が注目するのは、第2版の最終章における3篇の補填詩篇のひとつ「ある好奇心の強い男」に読まれる「私は死んでいた」という一句である。一人称で語る主体にとっては絶対的な未来であり、原理的に表象不可能な出来事であるおのれの死がまさに過去形で語られるという、この不可解な事態の意味するところを著者は徹底的に追及する。そこで導き出されるのが「死んだ私を見ている私」という主体の二重化のテーマであり、それは『悪の華』における一人称主体の特異性として本論文の後半でもひきつづき論及されることになる。</p> <p>次いで本論文の長大な第2章「終わりから始まるもの」は『悪の華』第2版の末尾に置かれた補填詩篇「旅」の読解に捧げられている。この集中最長の詩篇を読み解くにあたって、著者が用意した視点は「海」のテーマと「演劇性」のテーマのふたつである。</p> <p>まず、航海の詩である「旅」は一方で海洋詩であり、同時期に書かれた有名な「あほう鳥」や初版から削除された6篇の禁断詩篇のひとつである「レスボス」、さらには初版から収録されている「人間と海」などといった詩と内的な関連を保ちつつ、『悪の華』という詩集全体を海のイメージで浸しているという意表を突く指摘がなされる。そこでの海は詩人が船のデッキから歩哨として見つめる対象であるとともに、決死のダイビングを敢行する未知の領域の表象でもある。</p> <p>そして「旅」における演劇性の指摘は、17世紀の古典主義期の戯曲で1行の定型詩句が複数の登場人物に</p>	

氏名 佐藤 陽介

よって朗誦される際に現れる「詩行の断裂」という現象が、この詩にも起きていることへの注意深い着目からなされている。「ある好奇心の強い男」でも幕が開いた舞台の上に倒れている自分の死体を観客席から眺めるといふ演劇のテーマがあったように、「旅」ではすでに旅をした者とこれから旅立つ者との対話が演劇的に仕込まれている。ここで読まれるのは、ジャン・ジャック・ルソーがみずからの体験を告白するような自己言及的なエクリチュールではなく、一人称主語である「私」がひとりの俳優のように振る舞う「主体的エクリチュール」であるとするのが著者の結論である。

かくして「旅」は『悪の華』という詩集の精密な縮図であり、第2版のために準備されたものの結局未完に終わった「エピローグ」の代わりに、この詩集のいわば外部で十分にその役割を果たしている詩篇であることがまぎれもない明証さでもって示されるのである。

最後に、この種の論文としては異例なほどテンションの高い熱気あふれるスタイルで書かれた「結論」は、ロン・バルト流の「語り手の不在」を唱える昨今の構造主義的テキスト論に抗して、ボードレールをあくまでも最後の「言葉の所有者」として位置付ける。そうして作者の死後もいまだに読む者を惹きつけずにはおかない『悪の華』の主体的エクリチュールの働きとその効能を顕揚してこの論文を終える。

近年のボードレール研究が詩人の生きた時代の社会的・政治的背景にかんするイデオロギー的分析へと傾斜していくなかで、本論文のようにフランス近代詩の記念碑的詩集たる『悪の華』と真っ向から取り組み、数々の斬新な解釈を強力に提示している研究はじつに久しぶりといってよいだろう。従来、『悪の華』を論ずるにあたってはその第2版がいわば決定稿として特権的に扱われるのが通例であったのに対し、ここでは初版と第2版との異同が詳細に比較され、その結果として第2版で追加された補填詩篇の独自の意義をあざやかに浮き彫りにすることに成功している。また、個々の詩篇を別々に切り離して俎上に載せるのではなく、それらを『悪の華』という一冊の書物を構成する要素として、相互に関連しあう全体性のなかできちんと考察している点も本論文の見逃すことのできない優れた美点である。

以上をもって本審査委員会は、本論文がボードレール研究への着実な寄与を成し遂げたことを認め、博士学位の授与にふさわしい論文であると全会一致して判定した次第である。

公開審査会開催日	2018年 1 月 20 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	川瀬 武夫	フランス文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鈴木 雅雄	フランス文学	博士(パリ第7大学)
審査委員	上智大学文学部・教授	吉村 和明	フランス文学	
審査委員				
審査委員				